

KYUSAN JOURNAL

GRADUATES' ASSOCIATION

2020 AUTUMN
NOVEMBER



九産ジャーナル【 同窓会 ver. 】



宝満山登山



マリンワールド



宝満山登山



糸島



海の中道海浜公園



糸島

福岡タワー

今年度は新型コロナウイルス感染症の関係で全ての学校行事が中止となった。そのような中で10月下旬に1,2年生を対象に校外学習を実施。例年実施をしていた遠足の代替行事として、自ら行き先を決め、自ら課題に向き合う学校行事として初めて実施をした。近くは太宰府天満宮へ、遠くは広島県の厳島神社へ向かうグループもあり、向かった先々でそれぞれが教室では学ぶことのできない大きな経験を積んだことは間違いない。

陶芸の世界で生きる

今、高校生に伝えたいこと

9月4日(金)に陶芸家として活躍する本校卒業生の鹿谷敏文さんと太田剛速さんが日頃の活動報告をするために、来校した。

鹿谷さんは本校卒業後に佐賀の有田焼の陶芸家として有名な中村清六先生のもとで陶芸を学び、弟子入り後は1年間、土を触ることのない下積み生活を過ごした。

元々物づくりが好きだった鹿谷さんは、師である中村清六先生の陶芸の特徴である白磁の陶芸を極め、今に至っている。陶芸の魅力は「無の形から轆轤(ろくろ)を活かし、形になっていくところだ」と話す鹿谷さんは、これからも白磁の曲線美にこだわりを持ち、少しでも喜んでもらえるような作品作りに励みたいと、これからの思いを口にしてきた。

太田さんは朝倉郡東峰村小石原の出身で、本校に在学中は伯父宅に下宿し通学をしていたという。家業が窯元で、福岡県

有数の産地でもあったため、幼少期の頃から自然と陶芸を見る環境で育った。ただ、本格的に陶芸に取り組みだしたのは本校卒業後に通った九州造形短期大学(現在の九州産業大学造形短期大学部)に進学してからだそう。形のない土の固まりからいろいろな形の器や大物作品ができれば、それが陶芸の魅力です」と話す鹿谷さんと共通している。窯から出てきて生まれてきた作品は言葉では表現できない感動があるという。三十年以上この世界でやっているが、今も窯出しの瞬間が一番の楽しみだと目を輝かせていたのが印象的だ。自分自身が思った以上の色が出た作品は感動も大きいそうだ。

太田さんは過去にイギリスとスペインに約4カ月研修に参加した経験がある。海外に研修に行くことで改めて日本の陶芸の歴史や地元の小石原焼の歴史・文化・風習を学ぶことが必要であると実感



⑤鹿谷敏文さんと⑥太田剛速さんは共に本校の卒業生で、陶芸の世界で活躍しています。

したという。この経験により改めて小石原焼のことを自ら学び、地元でしか取ることのできない陶土、原料を活かして自分なりの表現、作品制作に取り組んで、百年後、二百年後の人たちが見ても心を動かすような作品を作りたいと、心境を熱く語ってくれた。

ふたりの対談の中で、現在の環境下における後輩(在校生)に対して心配をする一面もあった。やはり、このコロナウイルス感染症によって、高校生活に相当な制限が目に見えて感じるといふ。ふたりが過ごした高校生活の3年間とは違う、この1年は想像ができないと

口にした。ただ、「このような環境下であったとしても自分自身の目標、夢を見つけてほしいと願っています」という言葉は取材の中でも印象的で、自分自身が夢中になれるものに出会えたらそれだけでも幸せなことだといふ姿は、やはりふたりが今夢中になるものと向き



④山本順一理事長も陶芸の魅力について語りました。

令和2年9月4日(金)に本校の卒業生であり、陶芸の世界で活躍される鹿谷さんと太田さんが山本順一理事長のもとへ、日頃の活動報告を兼ねて訪問しました。

本校美術部教諭森北光信先生と本校の卒業生であり現在1学年主任の榎井浩平先生も交えて、時折本校での思い出話もしながら約1時間の対談を終えました。笑顔の絶えない対談が印象的でした。

